

『釋淨土群疑論』に説かれる阿弥陀佛と凡夫との呼応関係

村 上 真 瑞

私は、以前浄土に関しての様々な問題、すなわち浄土の有漏無漏・三界摂不摂・仏身仏土等の問題について、これらの懐感の問答は誰を意識して展開されているかということについて、発表したことがある^①。また別の論文において、懐感(A、D七C後半)と同時代、同地域において著名な法相の学者であつた窺基(A、D六三二―六八二)が、法相唯識の立場から種々の問題を主體的に論じた『大乘法苑義林章』に注目して、浄土に関する考え方を考察したことがある^②。その結果、窺基は中国浄土教諸家の考え方に對して批判的であり、浄土教を論難していることが明らかとなった。その論文においては、いかに論争を展開しその相互の背景にはいかなる思想が存在しているのかを考察し、発表している。

今回、阿弥陀佛と凡夫との呼応関係を考察するについて、まず第一にこれらの論文で考察した浄土に対する諸問題を根底として、救済される対象としての凡夫に注目して、懐感の人間観を掘り下げ、第二に、凡夫に対する阿弥陀佛からの具

体的なアプローチとすることができ、浄土の方角を定めて具体的な莊嚴を明らかに表し出すところの指方立相に注目して、懐感の師善導の説く指方立相論に展開される法相との間に繰り広げられた論争を取り上げ、いかなる立場から懐感是指方立相を理解していったのかを考察する方法によって阿弥陀佛と凡夫との関係を具体的に明らかにしていくことができる。最後に、阿弥陀佛と、凡夫との直接的な呼応関係を取り上げ、本願力が凡夫に加えられた時、凡夫の業の働きがいかに変わっていくか考察してみたいと思う。

以上の方法を用いて阿弥陀佛と凡夫との呼応関係を考察していくわけであるが、すでに第一の懐感の説く人間観については、昨年の日本宗教学会において発表し、また、第二の懐感の指方立相に対する理解についての説明は、昨年の浄土宗総合学術大会において発表した。

今回は以前の二回の発表を基礎として直接阿弥陀佛が凡夫に對していかに呼びかけ凡夫はいかにその呼びかけに對して

『釋淨土群疑論』に説かれる阿弥陀佛と凡夫との呼応関係（村上）

応じていくのか、逆に凡夫は阿弥陀佛に対していかに呼びかけ阿弥陀佛はいかにその呼びかけに対して応じていくのか、それらの関係を『釋淨土群疑論』の中に説かれる問答を通して考察していきたいと思う。

まず、懷感がいかに人間を捉えていたかについては、『釋淨土群疑論』の中に用いられる人間の呼称を通して考察することができる。すでに昨年の日本宗教学会において発表したように、広くは衆生、有情、人と呼ばれ、あるいは、菩薩、凡夫、凡愚などその呼称は様々ではあるが、『釋淨土群疑論』の中に一貫して流れているものは、三つの立場である。

第一の立場は、固有名詞などを含んで第三者的に捉えたものであり、客観的に人間を見ている場合である。

第二の立場は、対論の相手の範疇に関わる立場である。例えば、法相が相手であれば法相の立場から、三階教が相手であれば三階教の立場から、論述のためにそれぞれの人間観を説明せねばならない時、懷感はいらの博学を生かして、それぞれの立場の人間観を述べるのである。

懷感のこのような姿勢は、従来かえって懷感の本来の立場を見にくくして、誤解をされてきたことすらあったのである。しかしこの立場は、問答の中で必ず相手の問いに対しての答えの中で行なわれ、懷感の主體的な立場は必ず最後に現われてくるので懷感の本来の立場とは区別することができ

る。

第三の立場は、まさに懷感の主體的な立場から論ずる人間観である。衆生、有情、人、菩薩、凡夫、凡愚すべての呼称の中に、煩惱、それはあらゆる人間が誰でも本来有しているものであるが、それを決して断ずることができない罪惡にまみれた赤裸々な人間の姿を見出しているのである。この第三の立場こそ懷感の主體的な人間の捉え方といつてよいであろう。

また、懷感の指方立相に対する理解とその立場については、すでに昨年の浄土宗総合学術大会で発表したように、善導の指方立相の論述を初めとして浄土教と法相との間で行なわれた様々な論争を通して、懷感は法相との論争においても相手の立場に対する理解も示しつつ、常に凡夫は煩惱を断ち切れない存在であり、心の汚れた有漏なものであるが、しかしその有漏なる凡夫が三界を勝過した浄土に往生できるのは、阿弥陀仏の本願力が凡夫に加えられるからであると強く主張している。これは法相の唯心浄土と立場は確実に異なるものであるということができるといふ結論が導き出されたのである。

そこで今回は、阿弥陀佛と凡夫との直接的な呼応関係について論を進めていくこととしたい。

『釋淨土群疑論』巻第六において次のように阿弥陀佛と凡

夫との関わりが述べられている。すなわち

言^ハ度苦衆生^ニ化佛集^ニ自土^ニ化諸菩薩^ヲ令^テ興^ニ大悲心^一捨^テ自土^ヲ棄^テ生^ニ他方^ニ行^ニ大悲行^ニ教化^ニ十方^ニ有縁衆生^ヲ故言^ニ集^ニ極樂國^ニ度^ニ苦衆生^ニ如^ニ經論言^ニ八地菩薩由^ニ多寂證^ニ眞如理^ニ不^ニ肯出^ニ定^ニ教化衆生^ニ諸佛摩^ニ頂勸令^ニ出^ニ定教化衆生^ニ即其義^ニ也。故維摩^ニ經言^ニ此土菩薩於^ニ諸衆生^ニ大悲堅固。又言^ニ是人乃能捨^ニ清淨土^ニ而來^ニ衆^ニ此多^ニ怨害^ニ二處^ニ也。

と説かれるように、佛は、諸の菩薩に働きかけて大悲心を興さしめ、自ら真如の理を証することに安住することを許さず、清淨の土を捨てて汚れの多い此土へ赴かせしめ、有縁の苦の衆生を教化せしむるのである。常に佛は煩惱に苦しめられている凡夫のことを見守って教化の手を差し伸べているのである。

また、『釋淨土群疑論』巻第六には

阿彌陀佛^ノ光明遍照^ニ十方世界^ニ因^ニ光得^ニ見^ニ十方佛^ニ也。般舟三昧經說^ニ跋陀和菩薩請^ニ釋迦牟尼佛^ニ言^ニ未來衆生云何得^ニ見^ニ十方諸佛^ニ佛教令^ニ念^ニ阿彌陀佛^ニ即見^ニ十方一切諸佛^ニ以下此佛特與^ニ娑婆衆生^ニ有縁先於^ニ此佛^ニ專心称念^ニ三昧易^ニ成除^ニ障滅^ニ罪^ニ光明遍照^ニ見^ニ十方佛^ニ也。

と説かれるように、阿彌陀佛の光明は、遍く十方の世界を照らし、その光によって十方の佛を見ることができるとも、特に、阿彌陀佛は、娑婆の衆生と縁が深いので、阿彌陀

佛だけを専心に称念すれば、三昧に入ることができ、障りを除いて罪を滅し阿彌陀佛の光明に照らされ見佛することができる」と示されている。

また、同じく『釋淨土群疑論』巻第六には

今言^ニ亦見^ニ佛心^ニ二者是見^ニ相分心^ニ也。經言^ニ佛心^ニ者大慈悲^ニ是^ニ也。然佛有^ニ縁理内證^ニ智心^ニ有^ニ縁事外觀^ニ衆生心^ニ如^ニ縁理内證智心^ニ是自證分心^ニ佛佛^ニ相知^ニ。十地不^ニ測^ニ縁事外觀衆生心見分心^ニ亦佛佛^ニ相知^ニ。十地不^ニ測^ニ縁理及事^ニ外觀^ニ衆生^ニ相分心^ニ。如來加被^ニ乃至^ニ獼猴^ニ亦知^ニ佛心^ニ也。

と説かれるように佛の内証と外用の功德を唯識の論を以て説明している。佛の大慈悲としてあらゆる凡夫・猿にさえ手を差し伸べられている心は佛の相分心であり、道理と現象の両面を顧わし出して衆生の前に現われている姿であると示されている。また、道理のみを以て内に智を証する心は自証分心であり佛にしか解らない境地であるとされている。そして現象のみを以て外に衆生のために現われるは見分心であるが、衆生には知ることのできないものとされている。したがって、常に大慈悲を以て凡夫を見守っていて下さる阿彌陀佛の心は、道理と現象とを駆使して、影になり日向になつてできる限りの力を用いて我々に働きかけしめる佛の大きな力とすることができるのである。

また、同じく『釋淨土群疑論』巻第六には

『釋淨土群疑論』に説かれる阿彌陀佛と凡夫との呼応関係(村上)

『釋淨土群疑論』に説かれる阿弥陀佛と凡夫との呼応關係（村上）

四滅者此專念佛言約易修一念至誠即能滅八十億劫生死重
僊永絕娑婆三途苦報也。五緣者阿弥陀佛曠遠劫已來共衆生
結緣極重有於供養見聞隨喜同行等緣。乘此宿因一心稱念尋
聲則救永絕三燒也。六迎者以念佛罪垢滅除阿弥陀佛乘本
誓願與諸聖衆親自來迎。余法不然。故須三心佛也。七生者
如彼願言乃至十念若不生者不取正覺也。以三斯七義勝諸
諸法門故勸衆生終時念佛也。

と説かれるように念佛の功德を挙げる中凡夫との深い関わり
を示したものが顕わされている。すなわち、念佛によってこの
先八十億劫もの間生死を繰り返さなければならぬ程の重罪
を滅することができる。また、阿弥陀佛と衆生の縁は無始よ
りこのかた極めて深いものである。常に衆生と共に供養し、
其に見聞し、共に喜び、共に行じているのである。一心に念
佛すれば、五戒を犯した報いによって火に焼かれるような苦
しみも阿弥陀佛は永く切斷せしめるのである。また、念佛す
るものを阿弥陀佛は自らが親しく来迎せしめる。そして、間
違ひ無く極樂浄土へ往生せしめるのである。

以上考察して来たように阿弥陀佛と凡夫とは、無始よりこ
のかた極めて深い縁によって結ばれ、念佛するものを常に親
しく大慈悲を以て見守り救済せしめるのである。たとえこの
先八十億劫もの間生死を繰り返さなければならぬ程の重罪
を持った者であっても、阿弥陀佛の本願力が加えられ救済さ

れることによって、輪廻すべき業が作用しなくなり、重罪を
滅することができるのである。

五、むすび

以上『釋淨土群疑論』に説かれる阿弥陀佛と凡夫との呼応
關係については、最終的に三点に集約してまとめることが出
来る。

第一に懷感の人間觀においては、『釋淨土群疑論』の中に
用いられる人間の呼称を通して考察するならば、広くは衆
生、有情、人と呼ばれ、あるいは、菩薩、凡夫、凡愚などそ
の呼称は様々である。しかし、懷感の主體的な立場から論ず
る人間觀は、衆生、有情、人、菩薩、凡夫、凡愚すべての呼
称の中に、煩惱・それはあらゆる人間が誰でも本来有してい
るものであるが、それを決して断ずることができない罪惡に
まみれた赤裸々な人間の姿を見出しているのである。この立
場こそ懷感の主體的な人間の捉え方といってよいであろう。

第二に、『釋淨土群疑論』における指方立相をめぐる法相
との対論においては、善導の指方立相の論述を初めとして浄
土教と法相との間で様々に論争が行なわれて中において、懷
感は、常に凡夫は煩惱を断ち切れない存在であり、心の汚
れた有漏なるものであるが、しかしその有漏なる凡夫が三界
を勝過した浄土に往生できるのは、阿弥陀佛の本願力が凡夫
に加えられるからであると強く主張しているのである。これ

は法相の唯心淨土と立場は確実に異なるものであるということができるのである。

第三に、『釋淨土群疑論』において、阿弥陀佛と救済される凡夫との關係を大變積極的に論述していることが理解できる。従来懷感は淨土教を法相の立場から解明したと考えられがちであるが、本来の懷感の立場は、善導の説く凡入報土思想がその根底であり、法相の説く唯心淨土思想は法相思想の常識を理解していることを示すために述べたものであり、本来の懷感の立場からは離れたものであることが理解できるであらう。

凡入報土の思想が根底になれば、罪惡にまみれた凡夫が無始よりこのかた深い縁のある阿弥陀佛の本願力のたすけによつて、たとえこの先八十億劫もの間生死を繰り返さなければならぬ程の重罪を持った者であっても、輪廻すべき業が作用しなくなり、重罪を滅して救済されるという佛と凡夫とが互いに縁を持ち合つて呼応するという思想は構築し得なかつたであらう。

1 拙論『釋淨土群疑論』における淨土の一考察（『法然学会論叢』第五号）

2 拙論『釋淨土群疑論』における慈恩の影響（『印度学仏教学研究』第三十六卷第一号）拙論『釋淨土群疑論』における法相との対論（『佛教文化研究』第三十五号）

3 寶永版『釋淨土群疑論』六卷一二帖一行／八行

『釋淨土群疑論』に説かれる阿弥陀佛と凡夫との呼応關係（村上）

4 同右 六卷一九帖七行／一三行
5 同右 六卷二一帖一四行／二二帖四行
6 同右 六卷三一帖一三行／三二帖六行
7 八十億劫生死の罪は、この先將來八十億劫もの間生死を重ねねばならない重罪と理解すべきである。『釋淨土群疑論』には以下に示されている。一卷三一帖二行／一卷三一帖一三行／二卷一二帖五行／二卷一六帖一行／二卷一六帖一三行／三卷三帖三行／三卷三帖五行／四卷一八帖四行／四卷二三帖一六行／六卷二七帖一行／六卷二七帖一六行／六卷二八帖七行／六卷二八帖八行／六卷二八帖一五／六卷二九帖一行／六卷三〇帖六行／六卷三〇帖七行／六卷三〇帖一五／六卷三一帖一四行／七卷一三帖一二行／七卷一五帖一三行

〈キーワード〉『釋淨土群疑論』、懷感、阿弥陀佛、呼応

（佛教大学非常勤講師）